The Great Gatsby における作品分析と *Fitzgerald* 像

中　西　和　子

アメリカは第一次大戦を境として，外国から金を借りる国から，外国に金を貸す国へと変わり，戦後保守的な共和党政権の下に，富の集中化が進むにつれて，史上空前の「繁栄の時代」に入った。その好景気に基づく異常な経済的繁栄と，伝統的価値観の崩壊は，アメリカ全土を一種の精神的空白と退廃的風潮に追い込み，収支を無視した消費生活を人々の間に定着させた。また，戦前の社会において守られてきた父祖伝来のしきたりは，戦後その権威を失ない，その空白を埋めるべく新しい価値体系もまだでき上っていなかったが，依然としてピューリタニズムの伝統や堅苦しい生活習慣を固守する古い世代がいた。一方，平和と繁栄ムードで満ち溢れ，人生の目標と行動の姿を見失なった戦後派の世代は，そのエネルギーのはけ口を性やアルコール，ジャズ，ドライブ等の刹那的な快楽主義に求めた。この様にして物質的繁栄の裏には，新旧二つの世代の埋めるすべもない深い溝と，精神的貧困が渦を巻いていた。その時代の青年男女を忠実に描いたのが，Francis Scott Key Fitzgerald（1896—1940）の *This Side of Paradise*（1920）であり，T.S. Eliot（1888—1965）によって「アメリカの小説は“ギャッツビー”によって初めてヘンリー・ジェームスから，一歩前進した」[(1)]と賞賛された *The Great Gatsby*（1925）である。「ジャズエイジの桂冠詩人」とか「失なわれた世代の旗手」というレッテルを貼られた Fitzgerald は，その輝かしい名誉と，一変した文学的価値の急激な失墜と家庭生活の破壊といった波乱に富んだ短い人生から，時代の流れに自我の弱さから流されてしまった人生の敗者であると，一般的にはいわれているが，それは表面的な輪郭に

過ぎず，その無軌道で放埒な私生活と飲酒癖から，自ら作家としての才筆と人気を落し，同時に肉体的かつ精神的にも崩壊してしまっても，彼の心に残っている唯一の情熱，即ち文学に対する作家としての情熱と，自分の目的とする人生へのひたむきな追求とを，死を目前とするまで怠らなかった努力家である。しかし Fitzgerald の英雄的な身ぶりは，マスコミによってしか支えられず，1920年代の繁栄ムードが跡形もなく消えてしまい，批評家達が彼を無視した結果，世間もまた同様に彼に背を向け，彼は文壇から葬り去られたのだった。

I

1925年に出版された *The Great Gatsby* は，計画され尽くした作品構成といい，技法といい，Fitzgerald が才能の全てを注ぎ込んだ現代アメリカ文学の傑作の一つである。この作品の中で，最初に注目したいのは，創作技法である。筆者は，この作品を「私」という一人称の話し手を用いることによって，主人公の Gatsby を物語っている。これは十九世紀以来，伝統的に受け継がれてきた正統的リアリズムや，自然主義の手法とは全く趣を変えた，極めて斬新な技法である。では第三者に物語を語らせる事によって，小説の進行具合はどう変化するのだろうか。第一に自然主義的作品の様に，時制に制限される必要がない。この作品は，「私」という登場人物の一人が，過去となってしまった時間の事を語り始めるところから小説は始まる。事件の全貌を知っている「私」が，自由に現在と過去の間の時間を操縦する事によって，徐々に読者の前にあらゆる時の角度から，第三者の眼を通して，客観的にその事件の全貌は現わされていく。従って，小説の内容は無駄なく，計算し尽くされ，簡潔でテンポの速い文章となり，全体的な象徴的意味あいを読者の心に印象付けている。

The Great Gatsby のこの小説の語り手でもあり，登場人物でもある「私」即ち Nick Carraway は，永住するつもりで東部へやって来た。

東部は，彼やこの作品の登場人物にとって「富」と「成功」の象徴であるが，その東部に対する憧れは，その一部が崩壊するやなだれの様に崩れ去ってしまった——ちょうど Nick が Buchanan 夫妻の夕食に招かれた時，ポーチのテーブルの上で，わずかな風にもその炎を揺がし，今にも吹き消されてしまいそうな蠟燭の如く，うわべに対する根拠のないものである。New York に向かう途中に灰の谷があり，その灰の上から，Doctor T.J. Eckleburg と書かれた眼医者の異様な看板が，下界の人々を見下ろしている。しかしその眼はどうだろう。顔がなく，ただ巨大な碧い眼を，空しく見開いているだけの虚ろな眼である。その眼は，黄色い色のついた眼鏡越しにしか，物を見る事ができないのだ。物を正しくはっきり見る矯正の為の眼鏡には，色がついているのだ。その黄色い色によって，物は歪んだ角度から眺められ，灰のベールによって，なお正確な判断を欠くのである。その広告は書かれた当初，これ程虚ろな眼ではなかったろう。

> But his eyes, dimmed a little by many paintless days, under sun and rain, brood on over the solemn dumping ground.(2)

II

Nick の隣人である Gatsby が，Nick に自分の過去を語る時，それは Gatsby が自分の過去や生い立ちを，全て自分勝手に塗り変えてしまったにせものであり，その嘘の為に彼は，常に落ち着きを失なっていた。嘘を隠さんが為に，彼の話しの裏付けとして，もっともらしい品物を持ち歩き，愚劣ともいいかねない程の形式ばった言葉を使用する。

> He (Gatsby) was never quite still; there was always a tapping foot somewhere or the impatient opening and closing of a hand.(3)

しかし，哀れな程飾り立てた Gatsby の生活も，やがて報われる時が来る。現在の彼のこの生活は全て Daisy に捧げるものなのである。Gatsby が五年ぶりに再会した日は，雨ふりだった。しかし，五年間待ちに待ったこの再会は，彼の望んでいた様には，なかなかうまく事が運ばないが，やがて外の雨が上がり，日が照ってくる。'It's stopped raining'(4) 彼等二人の心は，雨の上がった空の様に五年前の心が，暖かく甦ってくる。'What do you (Daisy) think of that? It's stopped raining' 'I'm glad Jay'(5) この時の Daisy の流す涙は，Gatsby が五年間夢にまで見た清らかな涙である。しかし，次の時点で Daisy の流す涙は，もはや清らかなものではない。Gatsby の広大な庭園や邸宅，純金の化粧セットやワイシャツを見，そのワイシャツの山に頭を埋めて泣き出した彼女は，すでにこの時点で，Gatsby 自身よりも，彼の豪華な財産に目を奪われている。

Daisy の家の桟橋の突端に点る緑の灯火は，Gatsby の夢の象徴である。Gatsby の Daisy に対する愛は，無償のものである。彼はただ緑の灯火を自分のものとして手に入れる事だけを望み，過去の全てを清算し，五年前の時点に戻り，愛し合う事を望んだ。彼が取り戻したかったものは，自分自身である。彼は成功への道を独立独歩で歩んでいるうちに，彼自身が富に支配され，初期の目標を見失ない，同時に自分自身をも見失なってしまったのだ。二十世紀的成功者として富を得，金持ちとなった今，その心の内には虚無感しかなく，自分を取り戻す為には，Daisy と共に五年前に戻って，そこからやりなおすしかないと考えていた。緑の灯火は，まさに Gatsby の手に入ったかと思われたが，それにはあまりにも Daisy は俗物的で拝金主義者であった。*The Great Gatsby* Chapter I の前頁には，Thomas Parke D'invilliers による次の言葉が見られる。

> Then wear the gold hat, if that will move her; If you can bounce high, bounce for her too, Till she cry 'Lover, gold-hatted, high-bouncing lover,
> I must have you.'

Gatsby は，Daisy の為に金の帽子を被り，はねあがったが，Daisy はその悲壮で真剣な行為より，金の帽子に心を奪われてしまい，彼の本心を読む事ができず，'I (Daisy) must have you (Gatsby)!' とも 'I never loved you (Tom)' とも言わず，Gatsby の前から去ってしまった。飛び上がった Gatsby は，夢を手に入れることなしに地上に落下し，こなごなに砕け散ってしまった。

III

Gatsby は，その夏一度も使用しなかったプールで死んだ。不滅とも思われた夢が破れてしまった今，Gatsby は自己を回復できないまま人生を終えたのである。その死に方も水面を Gatsby が，水着姿のまま行き先もなく，たださ迷うだけである。五年ぶりに Daisy に再会した時，彼は白いフラノの洋服，銀色のワイシャツ，金色のネクタイという，成り上り者を代表する様な扮装で，Daisy の前に現われた。しかし，水着姿のまま水面を漂っている彼の姿は，金の帽子を被り，成功の夢を求めて遙かに高くはね上がった Gatsby の孤独な最期である。緑の灯火の消えてしまった今，彼の辿り着く場所は，地上にはどこにもなかったのである。彼は射殺されたのだが，それは肉体的なものであって，それ以前に精神的に彼に対して，死滅への引き金を引いたのは Daisy である。つまり物質主義，産業主義社会の巨大な力の前に，彼の夢は挫折し，彼は殺されてしまうのだ。

Gatsby の葬儀の日は，時雨だった。この降りしきる雨は，「神」の慈雨ではない。Gatsby の心に「神」は存在していない。その証拠に，彼が少年期の愛読書の裏表紙に書いた「時間表」には，それまでの人々が長年欠かさず行ない，「時間表」の最初に書かれるべき「神への祈祷」が書かれていない。彼は「神」に対して絶望しか感じていなかった。灰の山に聳え立つ Doctor T.J. Eckleburg の巨大な眼は，長い月日と風雨に晒

されて，今では虚ろなものとなってしまい，彼の夢として捕えた緑の灯火は，消えてしまった。彼の前に救世主は，現われなかった。神に対する恐れと，神に対する絶望とが，*The Great Gatsby* の底に流れる moral であり，それはまた Fitzgerald の思考とも重なっている。しかし「神」の存在を見失ない，物質主義に傾倒している人々にとって，心の拠り所はどこにもない。それ故その人々は，常に孤独なのである。以上のことからして，Gatsby の墓の上に降りしきる雨は，"baputesuma" ではない。夢を見失なってしまった Gatsby の涙であり，それは転じてアメリカの夢が，その崩壊を哀しむ涙である。'Blessed are the dead that the rain falls on'[(6)] と言わせたのは，筆者の Gatsby の死に対する聖書の言葉の風刺であり，と同時に，Gatsby の哀れな最期に送る筆者の心からの憐憫と同情の言葉である。

Nick は，中西部に帰る事を決心する。彼の見たものは，華やかできらびやかな表面の裏に潜む世界であり，そこでは物質主義が全てを支配し，虚無感と幻滅しか感じなかった。今や West Egg は，El greco の描く夜の風景の様に奇怪な夢となり，そこに描かれている酔いつぶれた女性は，Daisy でも Jordan でもあり，華やかな東部を代表するものの一つである，夜会服を着こんだ四人の男性は，Gatsby, Tom, Nick そして残る一人は George B. Wilson ではないだろうか。Gatsby を射殺したのは，灰の谷に住む Wilson である。彼の妻が，Daisy の運転する車に引き殺されてしまった時，Wilson の口から思わず出る言葉は 'Oh, my God!' の一言である。Wilson の心の中には，今だに「神」が存在しているのである。彼はおそらく，毎朝神に祈りを捧げるのを忘れない男なのであろう。彼の眼には，空しくその巨大な姿を雨風に晒している眼医者の広告が，まさに「神眼」に見えたのである。Repairs を職業としている彼は，もはや脱け殻と化した T.J. Eckleburg 博士を，心の中で完璧に修理し，その位置を不動のものとしている。彼のガレージには，"Repairs" の他に，"Cars bought an sold" と書かれている。彼は Doctor T.J. Eckleburg の力を借りる事によって Gatsby を殺し，彼の魂を代償として捧げる。こ

こにおいて，神の脱け殻である Doctor T.J. Eckleburg の眼は，Wilson の中で邪神となり，邪教の眼の象徴となる。

Ⅳ

Nick は，中西部の価値を再確認するが，一体中西部は，安住の地といえるであろうか。それが不可能である事を彼は感じている。

> I was thirty. Before me stretched the portentous, menacing road of a new decade.
> …Thirty——the promise of a decade of loneliness, a thinning list of single men to know, a thinning brief——case of enthusiasm, thinning hair.(7)

Nick の三十歳に対する心の打撃は，未来が，安楽とした生活を必ずしも彼に約束していないことを示している。中西部に帰っても，いずれは社会の波がそこまで押し寄せ，西部もやがて東部と同様，俗物主義が支配をなし，人々は孤独となり，莫然とした夢だけを抱いて「灰の谷」の中で生活する様になるであろうことを三十歳に対する，底冷えのするやりきれなさを描く事によって，もはや西部にも安住の地のないことを暗示している。

「F. S. フィッツジェラルド試論」の中で，Fitzgerald の作品について石一郎氏が，「Fitzgerald の小説には，ほとんど救いというものがない。どうせ駄目だ，じたばたしても同じだという」(8)と述べているが，この言葉は，*The Great Gatsby* においては，半分当てはまらないように思う。確かに結果からいくと，Fitzgerald の描く世界には，救いがなく，不安感と絶望だけが余韻を引き，読後には，無常感すら感じさせる。しかしそれでも尚，Nick も Fitzgerald も未来を信じているのではないだろうか。だから大海原へ，木の葉の様な船を漕ぎ出すのである。

Gatsby believed in the green light, the orgastic future that year by year recedes before us. It eluded us then, but that's no matter —— to-morrow we will run faster, stretch out our arms further ... And one fine morning ——
So we beat on, boats against the current, borne back ceaselessly into the past.(9)

もしアメリカの夢が，今その輝きを永遠に止めてしまったのなら，虚ろな眼医者の巨大な広告の見下ろす灰の谷での生活に対し，諦らめ，甘んじてもいいはずである。しかし，船を漕ぎ出す事は，明らかにその様な世界からの離脱を意味しており，強い意志の力を意味していると考えられる。しかし，その船は，死んだ Gatsby を乗せて水面を漂うマットレスと同様，辿り着くところがない呪われたものといえるが，それでも敢えて人々は，船を大海原へ乗り出すのである。そして夢はなくなったといっても，それでもいつの日か緑の灯火の見える事を信じて疑わないのである。人々にとって未来は，依然としてあらゆる可能性を秘めた，輝かしい不動のものなのである。この輝かしい未来を，Gatsby も Nick も信じており，Fitzgerald も信じていたのではないだろうか。そしてそれは，アメリカ人の信じるところであり，現在にまで続いている，不滅の「アメリカの夢」ではないだろうか。

Fitzgerald は，アメリカの繁栄の裏にある，空しさを追い求め，時にそれを信じ，また時に疑うという，不安定な思考の中に身を置いている。第一次大戦後の好景気に湧くアメリカにおいて，Fitzgerald も不滅の未来を信じていたと思う。しかし，その裏に潜む腐敗した社会を見，絶望的な敗北感を味わうことによって，その未来に一抹の不安を感じないではいられなかったであろう。その結果，先に述べた如く，救いをどこにも見い出せないのである。この信頼感と懐疑心との交錯は，Nick や Fitzgerald ももちろんのこと，二十世紀のアメリカそのものの姿なのではなかろうか。その点，Fitzgerald は，アメリカ的な作家であるといえ

よう。

V

巨大な邸宅を持ち，豪華な車を乗りまわし，華麗なパーティーに明け暮れる Gatsby と，この外面的華やかさをもった俗物主義的世界を，客観的な眼で，軽蔑の念をもって冷静に見つめる Nick は，その両者とも Fitzgerald の化身である。つまり，Fitzgerald はこの種の世界に，強い憧れを示すとともに，激しい嫌悪感をも抱いていたのである。彼は，生まれつき金持ちの家に育った人間に対しては，嫌悪を抱いていたのではないだろうか。なぜならそういう裕福な家庭に生まれたばかりに，幼ない時から華やかな生活の中で育ち，親から譲られた莫大な財産の上で，安住している金持ちというものを作者は軽蔑しており，その気持ちが Tom や Daisy の描写に現われている。それに比べ，不況において独立独歩で St. Pall 屈指の金持ちとなり，「成功物語」の主人公を地でいった器量の持ち主である Fitzgerald の祖父や，Gatsby の如く，自分の才能と努力によって成功を収めた者，俗にいう成り上り者に対しては，その華やかさを軽蔑をもって描いてはいるが，それと同時に，Fitzgerald はその世界の中に酔いしれており，その人々に対して彼は，好意と尊敬をもって眺めている。この生まれつきの有閑金持階級と新興成金との対照は，この作品の一つのテーマであると思う。それと同時に，貧乏人は所詮金持ちとは結婚できないという Fitzgerald 自身の結婚に対する姿勢も，この作品のテーマとなっていると思う。その不当さに対する観念は，彼自身の恋愛からきており，それは Gatsby のDaisy に対する気持ちとなって作品の中に現われてくる。この観念は，Fitzgerald が生涯抱き続ける彼自身の根底を流れる永遠のテーマである。

Fitzgerald は，富イコール幸福という当時の成功者の観念付けに，疑問を感じているのではないだろうか。有閑階級者の中において，Gatsby は単なる成り上り者として，人々に見られ，成り上り者として，死んで

いく。Gatsby の莫大な富の前においては，彼の本質はぼやけ，ただ不当な事業をして手に入れた金だけが，人々の眼に映り，それ故，彼の求め続けてきた夢が挫折し，Gatsby の死という形となって現われた時，Tom や Daisy，そして多くの人々は，その姿を隠し，Gatsby の葬式にもこようとしなかった。すでにそこには，精神的，道徳的価値観がどこにも見られない。しかも，Gatsby の死後，Tom も Daisy も依然として金持ちであり，何事もなかったかの様に盛大なパーティーに明け暮れることだろう。富のある連中が，必ずしも幸福であるのではなく，また一般的にいう金持ちこそが，アメリカ社会の中核をなし，幸福を手に入れるのに最短距離にいるのではなく，未来や夢をなくし，外面的華やかさや物質主義に浸り，実利を追う彼等こそ，つまらないアメリカ人であると，作者はこの作品を通して言っていると思われる。

以上の様なテーマに加え，アメリカの夢が，現実と過去と対照や，富の優雅さに憧れるGatsby と，現実社会における金持ちの世界の腐敗との対照等を織り込んで，この作品に書かれている。

Notes

(1) 野崎孝「20世紀英米文学案内，フィッツジェラルド」p. 37. 研究社，1966.

(2) F. Scott Fitzgerald : *The Great Gatsby*, p. 29. Penguin Books.

(3) Ibid., p. 70.

(4) Ibid., p. 96.

(5) Ibid., p. 96.

(6) Ibid., p. 181.

(7) Ibid., p. 142.

(8) 藤島泰輔「フィッツジェラルドの世界」——「20世紀英米文学案内，7」付録 pp. 5～6.

(9) F. Scott Fitzgerald : *The Great Gatsby*, p. 186. Penguin Books.